

国経研だより

神奈川大学 国際経営研究所
〒259-1293 平塚市土屋 2946
神奈川大学湘南ひらつかキャンパス
Tel. 0463-59-4111 (内線 2200)

「もう一つのウィーン紀行」

林 悦子

早春の候、国際経営研究所メンバーのみなさまにはご健勝にてお過ごしのこととお慶び申し上げます。

昨年暮れに、「ほぼ一巡しましたので、次号に書いてください」と、委員から非情な業務命令。そんな筈は…、と記録をひっくり返してみたところ、はたして先回は着任早々に書いているので、早や20年近くの年月が経過していることが判明。歲月人を待たず…光陰矢の如しとはこのことか、と改めて感慨に耽っているところです。さような次第で、今回は拙文にしばしお付き合いいただくことになりました。

さて、縁あって、一昨年の2014年にサバテティカルで半年間、昨年2015年はスタディー・アブロード(SA)の引率で約1ヶ月間、オーストリアのウィーンに滞在する機会を得ました。日本を除いて私の本拠地は、遅れ馳せの大学院生時代を過ごしたオーストラリアだったのですが、最近はすっかり「ラ」抜きのオーストリアに入り浸りです。そのようなことから、今回は題名だけは美しく、「もう一つのウィーン紀行」と洒落込みました。

恒例になっている元日のニューイヤーコンサートをNHKテレビで御覧になった方も多いかと存じます。ウィーンはいわずと知れた音楽の都。世界一といわれるオーケストラの響きは、万人の心に軽やかで美しいワルツの旋律を届けます。SAの期間は夏なのでウィーンフィルの公演はお休みですが、一昨年にはあの楽友協会でシューベルトの交響曲第8番を聴く機会に恵まれました。日頃音楽とは全く無縁の私でさえその感激は一入でしたから、音楽好きには堪らない土地柄でしょう。その他にも、美術ではハプスブルク家ゆかりの美術史美術館、スイーツに目のない人には“危険な”カフェや洋菓子店が目白押し…、白ワインの進むホイリゲ(中庭のある居酒屋)…。これらを結ぶ安くて便利な公共交通機関に、夜でも比較的 안전한土地柄は、特に女性の観光客に人気が高いというのも頷けます。

ところで、そのようなウィーンでドイツ語を学ぶSAが、英語以外の第二外国語受講人口が極端に少ない中で毎年安定した参加者数を維持しているのは、引率教員がエライのか(エッヘン…ではなく、一昨年まではドイツ語の小澤先生)、上述のような事情がクチコミで伝わるからなのか、昨年は9名の参加者を以て催行されました。詳しくは夏休み明けの「SA報告書」に日誌の形で記しましたので省きますが、私たちの思い描く「夢の都」ウィーンとは別の事情が、ウィーン大学のドイツ語講座からは垣間見えます。

昨秋来のニュース映像でご存知の方も多いと思いますが、シリアからの難民がドイツへ向かうルート上にウィーンやザルツブルクは位置しています。東欧のハンガリーから鉄道で抜けるルートです^(注)。メルケル首相率いるドイツが難民の受け入れに寛容な政策を打ち出していることが主な理由ですが、それ以前からEU域内の人の流れはドイツへドイツへと向かっていました。資本主義経済に日の浅い東欧諸国から、ヨーロッパで「独り勝ち」のドイツを目指す若者の多くが、「ドイツ語を身につけて」働き口へ向かうのです。そのため、どうしても日本をはじめとするアジアからの受講生は、なかなか初級クラス以上の授業スピードについて行けません。それは講師の教授法のせいではなく、受講生がモタモタしている仲間を駆逐してしまうのです。彼らにとって高い受講料は将来への貴重な投資。欧州文化に憧れてやって来る優雅な語学研修生とは質的に求めるものが違っているのです。翻って、文化を愛し、憧れの地で学べる私たちが如何に幸せであるかを確認する貴重な体験をしているのだと、はたしてどこまで我がSA Wienの学生諸君は自覚しているのかなあ…。

(注) ハンガリーやスロベニアなどの東欧諸国は、その後フェンスを築くなどして難民の入国を制限しています。

(所員/はやし・えつこ)

「日本シンジケート銀行信託団満鮮旅行」の調査より

泉水英計

昨夏、哈爾濱師範大学に誘われ標題の動画フィルムについて話した。第一銀行常務取締役として旅に加わった渋沢敬三が撮影したもので、現在は本学と北区の渋沢史料館に泣き別れになっている。私の関心は主に風俗記録にあるが、ここでは財界人の動きに着目して発表用のメモを拾ってみたい。

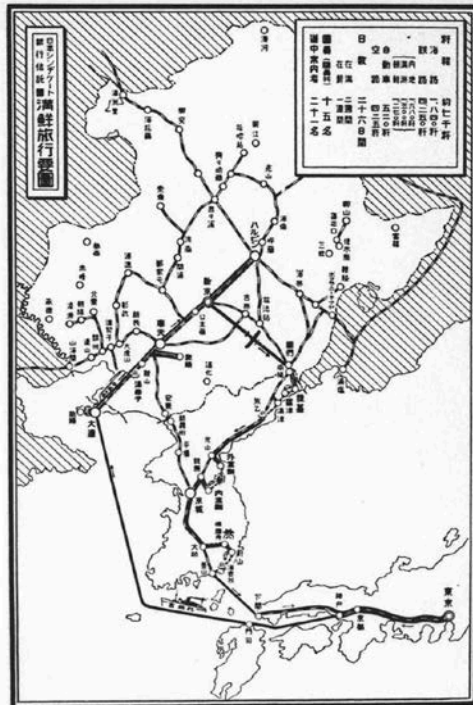
昭和10年春、民間金融界のトップ15名が満鉄と満州国政府の招待で同国および朝鮮を巡見、取締役会長の菊本直次郎が視察団長を務めた三井銀行の社史によれば、「建国当初、財閥の介入を許さずと呼号した軍部の空論はいちはやくくずれて、財界の歓心を買うため招待した」ものだという（『八十年史』）。この旅の詳細な情報は、同行が視察直後に発行した『満洲国視察報告書』に求められる。執筆は、調査課職員の泉山三六、この後に日満財政経済研究会に加わって満鉄と関係を深め、戦後は吉田内閣の大蔵大臣まで務めるが、国会で泥酔し醜名を残した（『トラ大臣になるまで』）。他には、愛知銀行の山浦護が紀行随筆『どろやなぎ』を帰国後すぐに刊行している。一方、ホスト側の満洲中央銀行は、記念撮影を小綺麗な装丁の帙に収めた『満洲視察記念写真帳』を制作し視察団員たちに贈っている。

渋沢のスケジュール手帳や「旅譜と片影」（『犬歩当棒録』）、『柏葉拾遺』の写真解説も参考にし行程を再現すると、4月29日の夜行列車で東京を出発、神戸で乗船、5月3日に大連に上陸、2週間かけて満洲各地を見学した後、図們より朝鮮に入り1週間で半島を南下して釜山より帰路に着いている。訪問先は、満洲では、海濱リゾート星ヶ浦や、清の太宗を祀る北陵（昭陵）、朝鮮半島では金剛山や仏国寺、海雲台など名所や景勝地が目立つ。大連や哈爾濱、奉天にあった神社や忠霊塔、旅順戦跡や北大

営の満洲事変起点はもちろんのこと、一見意外な困窮者福祉施設の救生院も日本人修学旅行の定番訪問先であった。満洲の賓客らしく各都市のヤマトホテルに投宿するが、湯崗子や朱乙の温泉宿にも旅装を解いたのは接待旅行だからだろう。現地滞在が3週間なのに、「招宴を受けた回数四十三回」というから、朝食以外はすべて宴会だったことになる。

有望な投資先という印象を与えるためには主要産業の将来性をアピールする必要がある。一行は、鞍山でダイナマイトによる鉄鉱石採掘、撫順炭鉱では露天掘りを見学、満鉄中央試験所では講義形式で説明を受けた。すでに主要産業に育っていた大豆油と肥料用油かすは三井系の三泰油房で観察している。吉林を横断して朝鮮北部に脱ける行路も産業視察が念頭にあったはずだ。満洲国の成立により、雄基および羅津、清津の北鮮三港は、日本と最短で結ぶ交通路の中継地として一躍脚光を浴び、インフラ整備を競っていたからだ。

視察団は満洲国政府の貨幣統一や鉄道増設、国都新京建設のもたらした経済効果に一定の評価を与えている。けれども、投資額の四割を満鉄が占め満洲国政府とあわせれば過半を越えていた。統制経済のもとで会社設立が満洲国事業部の認可制であり、実質的には関東軍の意向次第であることに実業家たちは懸念を抱く。また、謁見を受けた溥儀が専売所跡を王宮としていたことにも「搾取無き楽土安業の地」の舞台裏をみたようだ。この意味で、武装した鉄道警備員の存在も、万全の警備を印象づけるよりは治安の悪さを想像させた。吉林の横断が航空路になったのはこのような治安状況を配慮した予定変更である。新京から図們までの路線は完成していたが、匪賊による襲撃が頻繁に起こっていた。小型機のため荷物は列車で別送したが、危惧したとおりに京図線上で匪賊の襲撃にあったという。



三井銀行調査課『満洲国視察報告書』より

結局、満洲側は日本の「財界の歓心を買う」ことができたのか。新京での会議の席で、「満洲は日本の生命線なりとよく云うが、実際本当にそう思っているのか」と詰問する満洲国参議に対し、「生命線たる満洲国の所要資金だからとて是が非でも調達すると云うことは、此处でお引受けは出来ない」と視察団が逃げを打つ。「常に破顔談笑裡、諧謔さへ交へられたが、内容は可成り鋭い問答」であったと山浦は記している。冒頭に触れた『八十年史』の一節は、「しかしながら、菊本会長は、満洲国の現状は投資に適せずとの結論を得、これを三井合名首脳部にも報告した」と続く。これを読む限りでは、接待営業は失敗に終わったと解さざるをえない。渋沢の従兄弟である阪谷季一が直後に満洲国総務部長を辞任(5月15日)していることもその余波ではないかと勘繰ってみた。

しかし、その後、三井文庫を訪れる機会がありそれが誤りと知る。旅行中の渋沢のスナップを集めた個人用アルバムが満銀総裁の栄厚から贈られていたので、菊本に贈られたアルバムが見つかるかも知れないという期待があった。探索した資料は見つからなかったのだが、『報知附録』の揃いがあり、繰っていくと、資金移動払込の項目に、昭和10年4月25日に満洲国債3,000万円、5月17日と27日に満洲国貸金300万円、6月10日、20日、28日に1,500万円、7月30日に2,000万円、8月5日からは満鉄社債を3,000万円というような投資の記録が見つかった。『八十年史』の刊行は昭和32年、誤解を招くような記述は、植民地支配の歴史を冷静に省みるには未だ機が熟していなかったゆえの作為とみるのは邪推だろうか。

(所員/せんすい・ひでかず)

国際経営研究所 活動報告

出版活動

『国際経営フォーラム』No.26を発行致しました。今年度のテーマは『創』。ご協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

講演会開催

◆公開講演会 2

2015年12月17日に国際経営研究所主催の第2回公開講演会が開催されました。

講師：大山俊介氏(株式会社ジュピターテレコム元代表取締役副社長、現神奈川大学客員研究員)
 テーマ：『IoTが拓く未来-イノベーションによる新たな価値創造-』



IoTは何かなど学生にわかりやすくご講演いただいただけでなく、就職戦線についての取り組み方など人事側から見た貴重なアドバイスに学生たちは真剣に聴

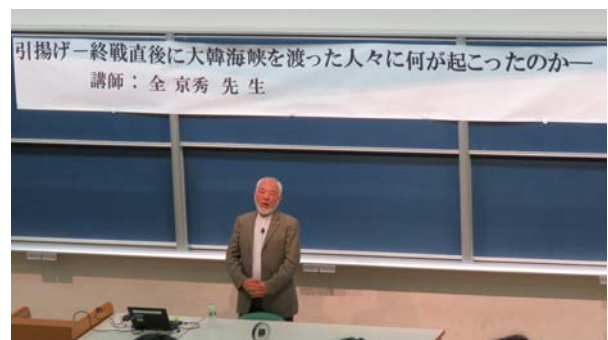
講していました。

◆公開講演会 3

2016年1月22日に第3回公開講演会が開催されました。

講師：全京秀氏(貴州大学教授、ソウル大学名誉教授)
 テーマ：『引揚げ-終戦直後に大韓海峡を渡った人々に何が起こったか-』

歴史の現実を語る先生のお話は非常に有意義なもので、学生の心にも深く響いていたようです。



地域、社会との取り組み

2015年11月19日に第9回平塚市産業活性化セミナーが「できることから始める6次産業化～少しの工夫で所得向上をめざしてみませんか～」をテーマに開催され、6次産業化の事例と成功のポイントについて講演が行われました。

次回2016年2月10日に第10回平塚市産業活性化セミナーを予定しております。(入場無料、事前申込不要)

The Learning Spirit

Theron Fairchild

Every semester, students in my English classes are required to submit a short essay or speech-essay, which I help them rewrite before final submission or presentation. This December, a freshman majoring in mathematics wrote a speech-essay entitled *The Mathematic Spirit*. In it he covered not only what motivated him to study the subject, but also the importance for learning the kind of thinking that one must have to succeed in it.

In the student's philosophy, mathematics is important because it teaches a valuable lesson, not only about math itself but also about life and society. The core lesson is that difficult problems require perseverance. At the same time, merely focusing on some kind of answer will often lead to no answer at all; the nature of the problem itself must be comprehended. The approach involves experimenting, reassessing, and when the problem proves too difficult, simply backing away from it to spend time on something more manageable. Ultimately, however, the problem should not be abandoned altogether, but returned to later, in a different way, using the benefit of experience gained from tackling other problems.

My student's attitude is consistent with eminent artists and scientists throughout history, where only two types of problems exist, the *solved* and the *not-yet solved*. Everything else is dialectic. As a teacher of a foreign language, I have found that student success in English communication follows a similar course, a kind of language spirit. There are only two types of individual communications: successful ones and ones that are not-yet successful. Navigating this deceptively simple spectrum requires not only patience and perseverance, but also flexibility and the willingness to experiment and fail. Merely focusing on the "answer" in a conversation is like offering the solution to $2 + 2$ when someone has asked about your family, a question that is really the speaker's hope that you and your family are healthy and happy.

Likewise, simply labeling the conversational

task as too difficult, and thus avoiding it, is not an option. There is either the successful communicative transaction, or another attempt is needed at the transaction. Words such as *fail* or *impossible* are typically about belief systems, not about real scenarios. This applies not only to successful artists and scientists. Just observe an elderly or handicapped person, trying to get up a flight of stairs or simply move from point A to B. Prescribed beliefs are insignificant compared to what the motivated individual can do to succeed. The position is not merely one of optimism, but backed by literature from history, psychology, education, creativity studies, and even neuroscience. Regardless of culture, the average human being has the capacity for considerable success, particularly given the right circumstances and motivation, primarily because it is characteristic of our evolutionary constitution to overcome challenges.

I am often asked, both in the U.S. and Japan, if and why I enjoy teaching. My reply is that teaching is a profession in which I can use the broad variety of my professional experiences, from business and education to the arts and sciences. More importantly, especially with students from another culture, teaching has taught me a great deal about the world and myself. Like my student and his mathematic spirit, the processes of language learning, as well as life learning, instill a similar spirit. When it is comprehended and effectively applied, a great deal is possible.

(所員/セロン・フェアチャイルド)

研究余滴

編集後記

第48号をお届けします。今号では林先生、泉水先生、そして初めてセロン・フェアチャイルド先生にエッセイの執筆をお願いしました。『国経研だより』に私が編集委員として携わるのも今号で最後となります。一年間ありがとうございました。特に原稿の依頼を快く引き受けてくださった先生方、サポートしてくださった国際経営研究所のスタッフに厚く御礼を申し上げます。(S)